金融教育の現場レポート

三重県立松阪高等学校
岡 恵美子教諭

～SDGsを踏まえた消費者教育～
身近な衣服である「制服」を通して消費経済や環境問題を実践的に学び自立した消費者としての力を養う

「金融教育」は社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や授業を受ける生徒の姿をレポートします。今回は、三重県立松阪高等学校（以下、松阪高校）の家庭科で実践する「SDGsを踏まえた消費者教育」について、担当の岡 恵美子教諭（以下、岡先生）にお話をうかがいました。生徒にとって身近な制服を題材に、環境保全や社会への配慮というエシカルな視点を学び、自分と社会全体の幸せな未来を築ける金融リテラシーを育成しています。

岡 恵美子教諭

家庭科のすべての学習分野にSDGsの視点を取り入れる

2020年度に金融教育研究校の委嘱を受けた松阪高校は、生徒のほぼ全員が4年制大学への進学を希望する進学校です。各学年に普通科が5～6クラス、理数科が2クラスあり、1000人近い生徒がいる大規模校となります。また、2021年度から5年間、三期目のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受け、生徒1人ひとりがさまざまな課題に対して、自ら考え挑戦していけるように取り組んでいます。

松阪高校における家庭科の授業は、家庭基礎として、1年生で2単位を履修し、家庭科のすべての学習分野にSDGsや金融教育の視点を取り入れています。その中で、「持続可能な社会の実現をめざして 自立した消費者になるために～SDGsを踏まえ、体験的・実践的に学ぶ消費者教育～」というテーマを掲げ、実習やグループワークなどを組み込んでいます。松阪高校で家庭科を担当する岡先生は、こう説明します。

「本校の生徒は、勉学意識や進学意識が高い反面、家事などの生活体験に乏しい傾向があります。日常生活に関連した知識や技術を身に付けることは、自立した社会人として必要不可欠です。限られた授業時間の中で、生徒たちが積極的に学べるように、家庭科に興味や関心を持たせる要素を取り入れることが必要と考えました。SDGsは、食や家族、ジェンダーなど家庭科のさまざまな学習分野に当てはまります。さらには、長い目で見た問題解決というSDGsの視点を持つことが、これからの人生を主体的に計画し充実した生活を送るための基礎力となる金融リテラシーの育成になると考えています」。

またこの実践授業は、2022年の成年年齢引下げによって高校生の間に成年になる場合があることも踏まえ、必要な

学習分野「被服の役割、制服の歴史」の授業の様子。制服の歴史を学び、制服がエコである理由をＳＤＧｓの視点で理解させる。

学びにもなっていると言います。

「高校生でも、今まで以上に主体性を持って考え、行動できる消費者力が必要になります。さまざまな消費者問題に対応できるように、主体的に意思決定ができる知識と能力を養うことも大切だと思います」。

制服を題材とした実践的・体験的な消費者教育とは

松阪高校の家庭科でとくに深く掘り下げる学習テーマとして「エシカル消費（社会や環境などに配慮した消費行動）」、「食品ロス」、「フェアトレード（公平・公正な貿易）」などがあり、今回本誌で紹介する「制服からの学び」もそのテーマの一つです。

「高校生では全体像をイメージしづらい消費経済や環境問題などを、自分事として考えさせ、生徒が自身で実践すべき課題に気づかせるため、生徒にとって身近な制服を題材にしています。さらに、持続可能な社会を実現するために何をしなければならないかを学ぶことで、自分のライフスタイルを見直し、主体的に行動できる消費者への成長につながることを期待しています」。

「制服からの学び」は五つの学習分野で構成されます。まず「被服材料、繊維の性質」において繊維について学び、オーガニックコットンやペットボトル再生繊維の特徴を学習します。次の「被服の管理、洗剤の性質」では、被服を長持ちさせる洗濯の方法や洗剤の特性について実験を行い、合成洗剤の環境への負荷などを学びます。

「たとえばエシカルファッション（環境や社会に配慮したファッション）を座学で教えても伝わりづらいため、ペットボトル再生繊維の原料などの実物に触れる体験型学習を通じて、理解を深めるようにしています」。

次に学ぶ学習分野「被服の役割、制服の歴史」では、制服メーカーの資料を基に岡先生が作成した教材「制服から学ぶエコ」で、制服のルーツや材料、CO_2排出量における制服と私服の比較、環境にやさしい着用の工夫など、制服についてのさまざまな知識を学ばせます。

残りの二つの学習分野は、以下に説明する「制服すごろく」と「被服実習」です。

制服すごろくを生かす工夫と学習効果

エシカルの視点から制服に関する知識を学んだ後、制服の製造から廃棄までの過程におけるCO_2排出量を見える化したボードゲーム「制服すごろく」を活用して、グループワークに取り組みます。制服すごろくは、「つくるエリア」→「着

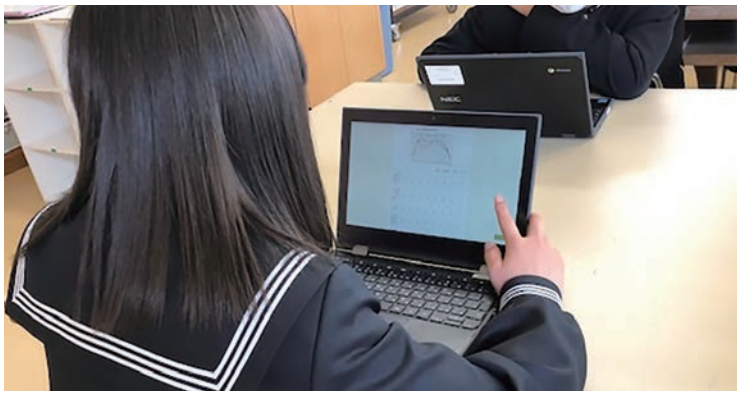
るエリア」→「捨てた後エリア」を順に進みエコを競います。マス目にはCO_2を排出する行為と、カーボン数という数字が示され、止まったマス目のカーボン数がプラスされます。CO_2排出量が大きい行為ほどカーボン数も大きいのですが、CO_2を削減する行為のマスもあります。そこに止まるとカーボン数を減らせるエコチケットがもらえ、最終的にカーボン数の一番少ないエコな人が勝ちとなります。制服すごろくの魅力について、岡先生はこう説明します。

「通常のすごろくと違い、早くあがった人が負けてしまい（制服の活用期間が短く、CO_2排出量が多い）、遅い人の方が勝ち（制服の活用期間が長く、CO_2排出量を削減できた）というところに面白さがあります。また、生徒がふだんの生活の中では意識しづらい制服の製作過程や廃棄後にも目を向け、制服を通したさまざまな環境負荷について、楽しみながら気づきを得られる仕掛けもあります。さらに、マス目のCO_2削減の実践例には『ハンガーにかける』、『ボタンをつける』といった身近な行動が書かれています。自分たちがふだんの生活で何ができるのかイメージしやすく、5R（ごみの発生抑制と資源の有効活用となる五つの行動）についても学べる仕組みになっているため、遠い存在に思えるSDGsを身近に感じることができると思います」。

制服すごろくを体験した後、自分たちが制服を通してできる環境問題への対応について考えさせ、それぞれの意見をワークシートにまとめてグループで意見交換を行います。生徒たちは他の生徒の多様な意見や視点に触れ、自分の考えを深めていくのです。

制服すごろくをグループで行う。さまざまな気づきがあり、思いがけない感想をワークシートに書き込む生徒も多い。

被服実習。制服の残反を活用して巾着袋を製作。授業で学んだエコな生地の実物に触れることで、5Rを実践している実感が湧く。



ICTを活用した授業。2022年度より1人1台の端末を持つようになり、さらに活用の場が広がっていく。

岡先生が制服すごろくの実践授業に取り組む際、生徒の力を引き出すために大切にしていることがあります。

「生徒に素朴な疑問や感想が生まれるよう、先入観を持たせないようにしています。また、自らの気づきにとどまらず、グループワークでの共感を通して気づきや認知を生まれさせ、他者との関わりを実感することで視野が広がるように導きます。そして、ワークシートや意見交換により自分の考えを整理させることで、環境負荷への課題の『認知』から、課題の解決に向けて何を実践するべきかを考える『メタ認知（自分の考えや判断を客観的に認知すること）』へと発展させます。さらに、それを実際に実行するために必要となる『非認知能力（意欲、協調性、創造性、コミュニケーション能力など数値化できない能力）』の育成までめざしていければと考えています」。

こうした工夫や苦心による学習効果は、ワークシートに書かれた生徒の感想に表れていると岡先生は言います。

「『制服を買うときや使うとき、自分にできることを心がけたい』といった、今の生活に関わっている『着るエリア』での一般的な感想だけでなく、『将来、CO_2の排出を抑えた繊維を開発したい』、『制服以外もできるだけ長く大切に使いたい』、『環境負荷を与えるほど多くの工程を経ていることがわかり、多くの人に

授業で活用する教材例。制服すごろく以外は岡先生が作成。
Ⓐ：制服すごろく
Ⓑ：サステナブルファッション
Ⓒ：制服から学ぶエコ

支えられている制服のありがたみを実感したので大切に着たい』といった感想もあり、非認知能力の涵養（かんよう）につながる深い学びを得てくれたとうれしく思いました」。

制服の残反を利用した被服実習で5Rを体験

制服すごろくを活用した実践授業後の被服実習が、「制服からの学び」に関する最後の学習分野となります。制服メーカー提供の制服の残反を活用し、巾着袋などを製作することで5Rを実践します。この実習のポイントについて、岡先生はこう説明します。

「制服すごろくで、制服の製造過程におけるCO_2の排出について理解した生徒たちが、環境に負荷をかけて作った布の残反に触れ再利用することで、これまで学んできたSDGsやエシカルを実感でき、さまざまな考えが深まると思います」。

また、完成までの苦労を体験し、製作者への尊敬と感謝の心を育むことも大切な学びであり、実用的な実習を組み込むことが新たな気づきを促すと、岡先生は期待しています。

「こうした実習は、SDGsのような抽象的な学びを具体化することができ、自立した消費者としての視野が広がります。たとえば、残反を活用した巾着袋などを自分で作ることで、『完成品が出回る便利な世の中は、限られた資源を有効活用できず、持続可能な社会の実現の足かせになり得る』ということに気づくなど、エシカル消費の学びが深まっていければと思います」。

SDGsを踏まえた「制服からの学び」による金融教育のねらい

今回のSDGsを踏まえた実践授業では、金融教育の重要な概念である「消費者としての社会的責任と意思決定」や、キャリア教育との共通の視点である「社会への感謝と貢献」など、多くの学びが期待できます。とくに「持続可能な社会の形成を意識し行動する力」が重要な学びの目的になると、岡先生は言います。

「『持続可能な社会の形成を意識し行動する力』とは、人や地球環境など社会全体のつながりを理解し、感謝の心を持って、未来の自分や社会を見据えて行動できる力です。持続可能な社会を築くために、社会の一員として自分に何ができるかを考え、主体的に行動できる態度を身に付けることを、大きな目的としています。個人の幸せには、より良い社会の実現が不可欠という理解のきっかけになればと考えています」。

また、岡先生は金融教育を種まきにたとえて、こう話します。

「社会の一員として責任を持って働き、家庭生活を営む経験をしていない高校生にとって、金融教育は芽が出て実るまでに時間がかかりますが、本人の幸せな未来や社会全体の豊かな未来へとつながるとても重要な学びです。健やかな芽が出て実るためには、水や肥料をやり過ぎると根腐れしてしまうように、大量の知識を一方的に与えないことです。そして、肥料は根から離れたところにまくと効果が高いのと同様、直接答えや結果を示さず、生徒が自ら気づき考え、学びを深めることができるようにしています」。

教科間連携によりSDGsを取り入れた学びを強化

岡先生は今後の課題について、教科横断的学びの重要性をあげています。

「SDGsを取り入れた金融教育は、現在と未来をつなぐツールとして、さまざまな教科での学びと結びつき、社会全体の課題に対して幅広く関心を持つきっかけとなります。また、家庭科の幅広い分野も他教科の学びと結びつくので、教科間連携によってより深い学びになると思います。家庭科でエシカルファッションやフェアトレードを通して学んだ環境破壊や気候変動に関する問題も、社会や理科などで家庭科の消費生活面とは異なる、社会経済面や自然環境面からのアプローチによって、生徒の興味や学びが深まります。新学習指導要領で示されたように、教科横断的カリキュラムを組むことの重要性は、今後さらに高まると思います。生徒が持続可能な社会の実現をめざし、エシカルコンシューマー（環境や社会のことを考えて消費する消費者）として豊かな未来の担い手となってくれるような金融教育の実践を、これからも心がけていきたいと考えています」。